

# 伊予神社奉納子供相撲

神崎評議員 友澤敏男

4月29日(祝)、恒例の伊予神社春祭り奉納子供相撲が行われた。

伊予神社は歴史的にも古く、人々の信仰を集めてきた。社の周りには巨樹がうっそうと繁っている。特に拝殿南の樟の幹は周囲八メートル余りあり、今、陽光に輝いている。まさに横綱の風格である。

この樟の根元の広場に、前日に2面の土俵が作られた。PTAや有志の協力で子どもたちが縄をなつて仕上げた。

当日の参加者は小学生60余名。東西に分かれ、お父さんの行司で「はつけよい」。男の子は、素足を砂地にめり込ませながら一心に押しまくる。始めは少し緊張気味だったが、どの子どもも周囲の声援と拍手を受けて、激しくぶつかり合う。女の子は、隣りの小さな土俵で、両腕を組み、片足けんけんで倒し合う。どうしてどうして元気なものである。社の横には、PTAの小さな



なお店も並んでいる。汗を流した子どもたちは、有志の方からたくさんのお品をもらい満足そうである。負けた勝つたは関係ない。子どもの紅潮した顔を見ていると、こちらまでさわやかな気分になつてくる。

神崎は、町外からの転入者が多く、今、住民の過半数に

▶女の子は片足けんけん  
▲負けてたまるか

及んでいる。小さいときから仲よく交流できる場として、この行事は続けてほしい。やがて、この子どもたちも成長し離れていくであろう。この緑多い社の森でのいろいろな体験が、よい思い出になればと思う。

## ハートボイスを受け止めて

北伊予小学校人権・同和教育主任 西岡しのぶ

「おまえ、生まれてこなきゃよかつたよな。」  
楽しいはずの誕生日に、母と兄から浴びせられた心ない言葉。その言葉に深く傷つき、次第に声を失っていく少女。そんな少女を深い愛情で支え続ける祖父母。ドラマのような実話をもとに書かれた書籍「ハッピーバースデー」をご存知でしょうか。

元小学校長で教育カウンセラーをしている作者が、教育相談に訪れた、言葉の出ない少女をモデルに書き下ろした作品です。我が子はどうしようもない子としてその存在さえ否定する母親の言葉に、少女は自らの喉を傷つけます。本来、信頼し合い、守り合うべきはずの家族によって、痛ましい精神的な虐待を受ける少女。しかし、その母親もまた、何事にも秀でた姉と比較され劣等感をもって育つたという生育歴があったのです。

主人公はやがて、美しい自然と祖父母の深い愛情に包まれることによって、自分が自分として生きる強さを取り戻していきます。声にならない心の声「ハートボイス」を受け止めてもらい、自分が認められ愛されていることを感じて、自分を取り戻していく主人公の姿を通して、私たちは、親として、家族として、教師として、大人としての在り方を問い直さずにはいられません。自分が人から大切にされていることを知った主人公は、友達をも大切に思い、転校した学校で出会ったいじめにも、自分たちの問題として強く立ち向かっていきました。

「この世に生を受けたものは、みんな尊い心をもっている同じ仲間なんだよ。虫にも心があるような気がしてね。」  
「自分の側から見ているだけでは物事の真理を見落とすぞ。」  
優しさの中にも、正しいものの見方を教えた祖父の言葉が、心に響きます。

子どもたちの生活に息づく人権教育は、「ハートボイス」を受容し、だれもが「生まれてきてよかつた」と思える家庭、学校、地域社会づくりから始まるのではないのでしょうか。

(出典)「ハッピーバースデー」

青木和雄作 金の星社